

混迷・激動の時代の 高校教育を考える

90年代に教科研は、「これまでの高校の学習内容、とくに普通教育のそれが、戦前の旧制中等学校と同じく、大学での学問習得の基礎とされており、カリキュラム全体も各教科の学びを総合して、(生徒) それぞれの人生観・社会観の形成に資するように構成されてはいない」という指摘をした(『高校教育のアイデンティティー』国土社、1996)。

そのときから18年が経つ。少子・高齢化、経済のグローバル化や産業構造の変化、経済不況、非正規雇用などが拡大、進行する。学校教育もこうした混迷のなかにある。「勝ち組」「負け組」を生み出す普通科高校の多様化・階層化は限りなく進んだが、普通教育としての教科内容／カリキュラム、普通科高校の本身は何も変わっていない。生徒一人ひとりの「人生観・社会観」の形成にはほど遠い。

各地の進学校では「詰め込み教育」「進学競争・狂騒」が展開される。学ぶことに意味を見出せず、苦役なだけの授業を必死に耐えて過ごす高校生は多い。「学びの空洞化」はますます進行した。

一方、少子・高齢化、限界集落化、経済の疲弊がすすむ地域で、政府が立ち上げた「地方創生」とは必ずしも合致しない立場から、「地域の存続にとって高校の存続／維持が不可欠」と頑張っている自治体や高校が、全国にはいくつもある。

いま、注目すべき事例や課題を拾い出してみた。一元的な尺度・競争では、何ともならないことを各論文から学びとってほしい。